

人間PR

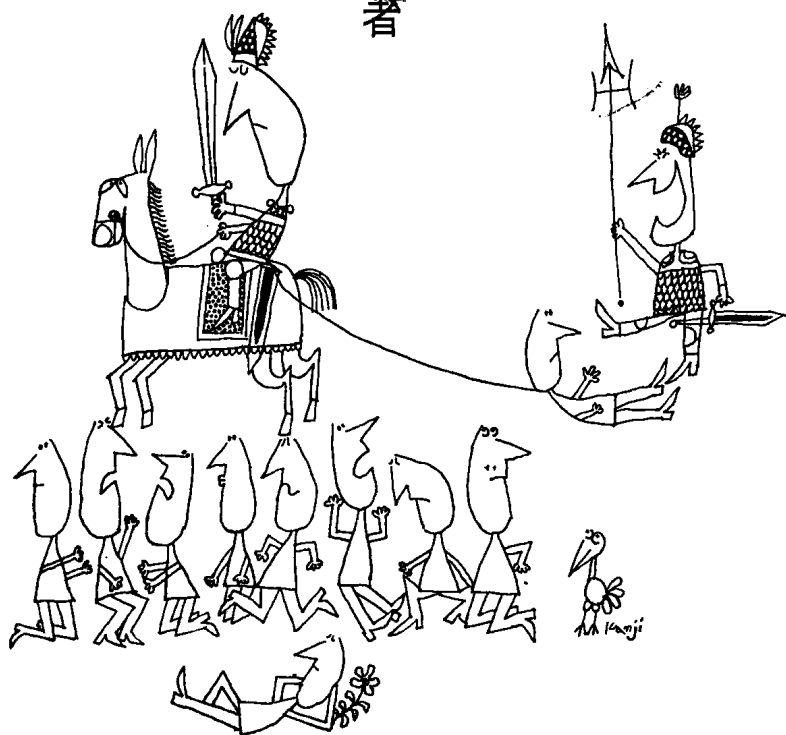
水田文雄著



水田文雄著
中央公論社

人間PR

水田文雄著





人間PR

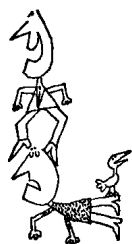
© 1961 検印廃止 定価 270 円

昭和 36 年 7 月 20 日初版

昭和 36 年 8 月 25 日 4 版発行

著者 水田文雄 発行者 栗本和夫 印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社 東京・京橋2-1 三晃印刷 求竜堂 協和製本



1961年
中央公論社刊

装幀・カット
佐々木侃司

人間PR 目次

名もいらぬ 二

上役のミイラ 一〇

エゴイスト 一六

嘘からの名声 二二

サムライの名声 二六

スタイリスト 三〇

ジェスチャーマンと演出 三四

汚点工作 四〇

嫉妬と暗殺 四四

出世のルール 五〇

もてたい心 五六

裸で有名 六二

無視と黙秘 七〇

人気と噂 七八

会議の人気者 八二

英雄の名声 八六

トップになるな 九六

勝者と敗者 一〇四

ねばりと名声 一〇八

終生の仕事 一二二

野に在るものの空言 一一八

白眼族の反発 一二三

貫禄と地位 一三〇

追放と汚名 一三六

豚と名声 一四〇

背広西行 一四八

人生の舞踏会手帖 一五四

封建的だわッ 一六四

人間愚行の連続 一六八

あとがき 一七六

人
間
P
R

名もいらぬ

「世間や同僚の評判なんか、自分は少しも気にしない」と、世の誰しもが、一応はきれいなことをいう。だが、はたして額面がくめんどおり、そうなのであろうか。

正直に自分の心をレントゲンにかけてみると、意外にも、怪しい本心のシルエットが、浮かびでてくるのに気づくだろう。

「あのかたは立派なからだ」

「あの人は無欲だ」

「あれは、さっぱりした人間だ」

「あんな気まえのいい奴はない」

と他から批評されてよろこぶ心、そうした世間のうわさを耳にするのを、たのしむ欲は、とりも直さず評判を追う心である。

むかしのサムライが、はがくれ武士である誇りをふりかざして、



「葉隠とは死ぬることと見つけたり」

などと豪語し、なにかという死を急ぐ生活を送った。旧軍人は、さくらのマークを至るところにつけて、君国のために一身を鴻毛の軽きに任じた。

そしてその死に対して、世の賞賛があたえられ、当人は死をもてかちとった「名声」をはくした。この死をいとわぬ人々のなかには人生のいっさいを無と観念し、さとりとあきらめに徹底したように一見みえる人もあるが、なおよくその人々の心の底を見すかしてみると、これがなかなか、そうばかりとは受けとれない。

人間の食欲や色欲その他の物欲が満たされたのちに、追い求めるものは、名誉であるという。

敗戦前まで、物欲にも色欲にもみちたりた世の大実業家たちが、終生のねがいとして望み求めたものは、男爵のくらいであった。

ことに軍人は、ことあるたびに勲章に、ありつけた。山を攻めた、城を落した、どこそこに進駐し、何々作戦に参加した、そのたびごとに勲章がもらえた。

しかし、爵位や勲章は、いままらどうでもよい。問題は、形にあらわれないところに存在する評判や人気への、異常なほどの執心である。

「あの人は、なかなかやり手だ」といわれたい人もいよう、「あの人は頭がいい」「あの人のいうことは、するどい」「あの人は話せる」「あの人は面白い」、さらに百歩をゆずって「あれはヌーボーだが、人間に幅と深さがある」、こう人からいわれることは世の誰でもが欲するところである。まことに、うるさいことだ。それを上役や社長が言ったとなると、さらにうるさい。

非凡である、ともいわれたかろう。異才であるとも、奇才であるとも、いわれて悪い気はしない。これがさらに念が入って、あれは奇人であるなどと、いわれることになる、いささか迷惑なようであるが、それだって、無視されるよりもよほど本人にとっては嬉しいのである。

ともかく人間というものは、生来、自分を認めさせるよろこびをもっている生物である。

なるほど、名のでることを恐れる、などという奥ゆかしくも古風な、たしなみもあるにはある。しかしこの心理を分析してみると、名を世間にあらわさずにはおくが、心の中では実は、しめたっと思う満足感があるのに違いない。というのは、それは名も知られずに良いことをしたと思う自意識の誇りを、鼻たかだかと自分の心の中では、やらかしている人物なのかもしれない。まさに自己に送る拍手である。一種の榮譽心の満足であることに変りはない。

こうして人間の心の欲望は、いろいろな形をとって果たされてゆく。

もしそれが善根ぜんこんをつむ目的の行為である場合には、「たとえ生きている浮き世の人には、このことが知れなくとも、神さまや仏さまは、ご存じであろう」といった、案外にも功利的な意欲があるのかもしれない。

たとえば死んだ子の供養のために、名をすらかくして哀れな人につくす心、これはけっきょく宗教的な功德とくどくを自分に求める欲求に通じる。しかしこの場合にも、「これは自分のためではなくて、死んだ子のためなのである」とはいうだろうが、要するにそれで、生きている自分の心も安まるのであるから、自分のためであると、いえないことはない。

それを、自分の死後や来世の安楽をねがうために、善根をつむのだといってしまったのでは、自

己の欲望のために、将来に向かつての先物買いをやり、心に貯金をするのに他ならないということになり、まことに実もふたもない。

だから、こうした目的のために、名を伏せるとか名を告げないという、むしろ世俗的な慣習には、その心根を一概に清らかなものと尊んではいられないものが、潜んでいると看破できるのである。

「陰徳あるものは、かならずその榮をうく」とかいわれているが、それはこうした名をあらわさぬ手法に対して、一種の「戻し」とか「リベイト」的なものが約束されていることを明らかに示す。変え手の「特戻し」である。

名をかくす方式のほうが、徳を積む上では勤務評定が高いなどと、かりそめにも考えているようでは、ひそかにその反対給付である御利益を、期待しているのだと判定せざるをえない。

いったいに、自分をぎせいにすることは、無欲の同一語かのように思われてきた。ところが、たとえばこの道のベテランのキリストについて、こういう皮肉な見かたもできようというものだ……。

「一身を殺して、人の子のぎせいに十字架上の身となったとはいうが、一身を殺すことで、あれ以来、二千年もの長い間、あんなにも輝やかしい栄光と大きな名声を、えられるなら……、そうと知っていたなら……、たくさんの人の中には、どうせ一度はすてる惜しくもない一生だと一命を投資して、救世主メシヤの株を買いにでたものだって、案外さらにいたかもしれない。それにしてもキリストというアイディア・マンには、まったくうまく、してやられた」

という言いぶんである。この表現は、あられもなく下品なようにひびくが、しかしまた、一面の観

察ではあろう。

もし人間の名声というものが、色欲にも金錢にもまして、人々の追い求めるものであるとするならば、いまから数えて一九六一年まえに、しよせんは死ぬべき宿命である自分の命を投げだして、あの名声を身につけることを心がけた有志者は、けっして、なくてはなかつたらう。

そのために、たとえキリストがやったように、滅相もない女性との交渉など断たなければならず、この世での欲など、すてなければならぬとしても、少しも惜しくはないほどの死後二千年も続く、まことに買うに値する偉大な名声であるといえよう。

それに着目したのか、そののちに続いた幾多の名僧神父が、わき目もふらず、それこそ一心不乱、難行苦行のかぎりをつくした。

これはなにもキリスト教にはかぎらない。聖職の心の底には、怪しくも招く教祖の名声が、自己に潜在する名声欲と、びったり合致して、それに呼びよせられるものが、あつたからである。

すてたやうで案外に、すてていないのが、はてしもない人間の名声への欲求である。

死ぬまぎわになって、最後の言葉を求められた聖僧が、「あーあ、死にともない、死にとむない、ムニヤムニヤ」と、いったという。あれほど常日ごろ、悟りの道を教えたもうた師の君が、こともあろうに「死にともない」とは何ごとか、さりとて人聞きもわるい、何か間違ひではなからうかと聞き直してみたが、とうとう「死にたくない」の一てんばりで、この世を去っていったという。

あとに残ったものどもは、恐らくこれをヒン曲げて、「あの君は、まだ仕のこした修行がある、と告げられたのだ」ぐらいなことにはすることだらう。

しかしこの聖僧の言葉こそ人間の真情ではなからうか。そうだとすると、人間が健康な間に、たとえ何と立派な口をたたこうが、それはすべて、心にベールをかぶせた作為的な言動にすぎないことになる。無作為ではない。

最近、深層面接（デプス・インタビュー）や投影法やサイコの方法で、動機（モティベーション・リサーチ）調査が重んぜられるのも、この人間の不正直さを疑うからだ。

潜在意識では、死にたくもないと思っている名僧が、体が丈夫で死にそうにもない間は、周囲の事情とか自分の地位とか、それにもまして職業上の関係から、いかにも悟りきったふうな口もきけるのである。自分自身すら、悟道に入っているとばかり早合点しているのである。

さてしかし、だんだん体が冷えこんできて、なんとなく「無明の闇」が現実に迫ってきたような空恐ろしい生理状態とか心理感覚に立ちいたつてくると、前に吐いた高言が嘘の皮であったことを、初めて自分でも発見するのである。

ところがこの瀬戸ぎわでも、よくよくの最後まで嘘つきとか不正直ものとか、または強情っぱり（きやうじやう）の聖者ぶつたものだけは、死後の自分の名声と、自己の教えの崩壊を恐れて、歯をくいしばって「大往生」をとげて行くのである。我慢つよいのは大したものだが、要するに不正直だ。

人間の空想によって描いたパラダイス、そこへ行けば、さぞかし快適だろうと、一途にそこへ行きたがる欲望の盛んなもの、または後の世までの聖者の名声を守り続けたいもの、その名誉心の強く栄光欲にとりつかれた業（ごう）つくばりの頑固（くわんこ）ものが、ご希望どおり末の世までの栄誉（えいよ）になっている。快適らしい天国に移住して、しかも名を千年のちにたれるとは、欲ばった一挙両得である。こ

これは米国や共産圏にそれぞれの好みから、移住したがる気もちとも、多少似ていよう。

人間は、名声などに恋々としないう立派な人だと人にほめられる、そのほめられること、そういういわゆる名声が、実はほしいのである。名もいらぬという名が、ほしいのである。

こんなことをいうと、いかにも私の勝手な、独断にみちた本のように思う人もあろう。名声論などおよそ学問的じゃないと思う人もあろう。それならそれでも、よろしい。しかし、この「名声」という得体のしれないテーマにだって、実は立派に、学者の研究があるのだ。

一例として、かの高名な厭世哲学者ショーペンハウエルが、名声というテーマに関してどう考えたかを見よう。彼に関係した書物で、『フラウエンシュテットとの対話』という一文に、こんなことがでている。

「名声欲をばショーペンハウエルは、老年の根本特徴とした。彼はかつて私にいったが、人生の各時期には、それぞれの情熱をもっており……青年期には、それは愛であり、壮年期では権力と所有、老年においては名誉である。すべて他の情熱の消え失せた老人でも、ただこの一つの名誉欲のみは存在するのだ……」というのである。このあたり、人生のたそがれ組には、あまり旗色がよくない。さらにこんなことがでている……。

「ショーペンハウエルは、名声というものは、有害な面をもっていて、一たん有名になると、人はそれ以上にのびなくなるか、かえって退歩するものだ……」という。この点、有名でないものには、まだ進歩が残っているというものだ。またさらに、

「あるとき彼は私に、セネカの手紙の、名声というものは徳にそう影のようなもので、いやでもあとからついてくる、影と同じく、あるときは先立ち、あるときは後^{おく}れるが、……という一節を引いて示した」とある。

またこういうこともでている。

「オソリウスの『名声について』を読んだ話をしたが、このオソリウスのいうところによれば、人は名声をうるためには、それを求めてはならないのであると……」

「あるフランス人のいったことも、なかなか面白いという。それによれば、よい評判をあげるには、仲間ばめの場合と同様、欠点もまたのべ立てるにかぎる。そうするとはじめて、よい点だけが浮かびあがって、欠点のほうは忘れられるというのだ……」

以上で、このドイツの哲学者が、いかに名声について深い関心をよせていたかが知れる。

それと同時に、われわれとしては、オソリウスというポルトガルの著作家がいたこと、そのオソリウスが『ポルトガルのキケロ』とまで呼ばれた学者であったこと、一五〇六年から一五八〇年まで生きたオソリウスが、前記のように『名声について』などという、本書のテーマそのもののズバリのような書名の本を、すでに書いていることなども知った。

とにかくこうして西欧の思想家たちも、この名声ということを、古くから気に病んでいたことだけは明白である。

だが、学的探求などという身につかぬまねは、これで打ちきることにする。読者もホッとすると確信する。やはりあとは、あまり世に益しない私流の勝手な書きかたで行くことにしよう。

上役のミイラ

何かいやなことがあったり、上役から文句を食ったりするたびに、私はいつも、あることを考えることにしている。

それは、いまから何千年も前の、エジプトに住んだ人々に思いをはせることである。私はカイロに行ったとき、しみじみとこれ考えた。古代エジプト時代にも、悲しかったり、くやしかったり、幸福だったり、有名だったりした人々が、いたわけであるが、それがいま何だ、という考えかたである。

なにもエジプトにはかぎらないが、土地が夢幻的であるだけに、私に与えるイメージ効果が大きいいというわけだ。いまはナセルの天下になっているエジプトの町は、私には何だか黄色味のかかった、まるでトノ粉をまぶしたような色彩にみえた。その黄色い砂の中に立つピラミッド、その中から掘りだされた、あの有名なツーターンカーメン王の金のわらじを見たのだ。

わらじと見立てたのは私が日本人だからで、さしずめ金のサンダルというわけであろう。しかし

